



さあ、この顔？ だれだったか覚えていますか？

…そうです。25号と26号で紹介した渡武彦さんです。『すくすく育て玉黄金 成長て為なれ島ぬ宝』という言葉を作られたり、よく子どもたちに昔話を聞かせてくださ

ったりした方でしたね。子どもたちへ深い愛情を注いでおられたことは有名です。明治33年11月25日 田検集落に生まれ、平成2年9月7日92歳で亡くられました。昭和55年には「田検小学校創立百周年記念事業」の委員長もされました。

今回は、武彦さんの生い立ちを紹介します。

## 1 子どものころの武彦さん ～心優しく働き者～

今から108年前(明治41年)、田検小学校(昔は田検尋常小学校と呼んでいた)に入学。

福行じいさんから「いなか、武彦。人間はいろいろな災難に出あうことがある。だれでも幸せになりたいが、うまくいかないこともある。そんなときにはみんなが助け合わなければならないぞ。自分もいつかは人から助けてもらうこともあるのだから、人には親切にするものだ」と教えられていた武彦さんは、おじいさんに似て心優しい子どもに育っていきました。

武彦さんは、よく働きました。「自分に割り当てられた仕事は、最後までやり遂げるのが家族の一員として当たり前のことだ」と福行じいさんから厳しく教えられていたので、小さいときから自分の家の仕事も学校の係の仕事も、責任をもってきちんとやり遂げる子どもでした。

ときどきは、福行じいさんに連れられて畑や田んぼの仕事もしました。「武彦よ。作物は人の心が分かるんだ。毎日畑を見回り、手入れをすれば、たくさん実ってくれる。稲(米)は、田んぼのご主人が稲の横を通るだけでもすくすく育ち、豊作になるんじや」。

福行じいさんのこんな教えが、武彦さんの心に染みこんでいったのです。

## 2 もっと勉強がしたい

田検小を卒業した武彦さんは、一日おきに青年補習学校に通いながらサトウキビや米作りに励みました。夜はランプの明かりを灯して勉強を続け、2年間の補習学校を卒業。すると「もっと勉強がしたい。大和(内地)に出てもっと勉強がしたい。そして技術を身

に付け、一人前の仕事ができる大人になりたい」と強く思うようになりました。武彦さんの夢はふくらみ、その夢を実現するためには内地に渡って勉強しなければなりません。内地に行くには旅費がかかります。武彦さんは、田検小学校の用務員になり働きました。休みの日は、木材を切り出す仕事をしてコツコツとお金を貯め続けました。

その姿を見ていた親と福行じいさんは、武彦さんの気持ちが本物であることを確信し、内地に渡ることを許すことにしました。「武彦。農業はじいさんが守る。おまえは内地に行って学問と技術を身に付け、立派な技術者となって島に帰って来い。そして島の人のために働くんじやぞ」という福行じいさんの言葉が、武彦さんの心をさらに奮い立たせました。

## 3 まじめに働きながら必死に勉強

大正8年。今から97年前に内地(鹿児島市)の土を初めて踏みしめた武彦さんは、まず自分の生活費をかせぐために大工の見習いになりました。

もともと手先が器用でまじめに働く武彦さんの姿は、すぐの回りの人たちの目に留まりました。ある時、彼の仕事を聞きつけた国の鉄道省の役人は、武彦さんの腕前と人柄に感心しました。そして鉄道省熊本建設局八代工事事務所の作業員として雇ってくれたのです。工事事務所では大勢の人々が働いています。

その中に、金や銀色のボタンが付いている制服を着てきびきびと働く人の姿がありました。武彦さんはその姿に感動し、「いつか自分もあんな服を着て仕事が出来るようになりたい」というあこがれを抱きました。金ボタンの制服を着ている人は、専門学校の卒業生や難しい雇用試験に合格したわずかな人たちでした。彼らは工事現場の監督や主任として、責任の重い仕事を任されていました。

「自分も金ボタンの制服を着たい。勉強をして難しい雇用試験にも絶対に合格するぞ」。そう心に決めた武彦さんは、働いたお金で専門書や問題集を買い、毎晩遅くまで死に物狂いで勉強をしました。人から教わるのではなく、本を読み、自分一人で考え、学問を身に付けていく独学という方法を2年間続けました。そして見事に雇用試験に合格したのです。

## 4 あこがれの「金ボタン」の制服を着られない

せっかく苦労が実って合格したのに、金ボタンの制服に袖を通すことができません。それは、その年に専門学校の卒業生が多く入ってきたので、雇用試験に合格しても金ボタンの制服を着ることができなかったのです。専門的な学問と技術を学んで入ってきた専門学校の卒業生から順に責任の重い仕事に就かせたのです。悔しさを滲ませた武彦さんは・・・(つづく)